

北川まanta
Manta Kitagawa
IL: Nidy-2D-

ガンソード 狂死

異能の騎士と忘却の少女

試し読み版

カバール・口絵 本文イラスト
Nidy-2D

プロログ エターナル・シフト

——旧都東京練馬、第二十七地下避難所——

「主任、エターナル・シフトの準備が整いました！」

「おっけー！ さあ皆、準備が整ったわ！ 名残惜しいのは分かるけど、もう時間が無いの。説明した通り、各自、コンソールボックスに入ってコンバーターを装着してッ！」

決して広くはない地下シェルター内^{ひび}に響く、白衣を羽織^はった女性の声。

すぐそこにまで追った終末の時を表すかのよう、その空間は悲鳴を上げながら幾度も上下に揺れ、もはや戻ることの叶わない地上からの強烈なノックに何とか耐え続けていた。

「お姉ちゃん……離れたく、ない……」

「大丈夫よ。向こうの世界に行ったら、またずっと一緒にいられるから」

「うそだ……もう会えないよ、きつと……ひつく……」

「聡真……ほら、泣かないで」

「あ……お姉ちゃん……」

涙を流す少年と同じく隣のコンソールに腰を掛けていた少女は、そう言って優しく弟を抱き

締める。

彼女は少年のたかだか三つ上程度の年齢であったが、少年にとつてその姉は、それこそ母親のような存在であり、また少女も弟を自分の子供のようにな愛がっていた。

「強くなるの、聡真。貴方はもう、守られてるだけの男の子じゃない。お姉ちゃんが聡真のことを守ってきたように、聡真も誰かを守るくらい、強い人間にならなさい。貴方が生涯掛けて守るような存在が、向こうの世界に必ずいるはずだから……私にとつての聡真のように、ね」

「お姉ちゃん……」

抱き締め、弟の頭を優しく撫でながらそう言葉を掛ける。

少女の方も、分かっていた。或いは、もう二度と最愛の弟と会えなくなるであろうことを。だからこそ、彼に強くなることを望んだ。自分がいなくても、この先ちゃんと生きていけるように。

そして——そんな姉の気持ちをも、少年も幼ながらに理解していた。

「……わかったよ、お姉ちゃん。僕、強くなる。誰かを守るくらい、強くなる。それで……いつか必ず、お姉ちゃんに会いに行く！ 会って、こんなに強くなったって、自慢する！」

「聡真……」

少女の目に、涙が溜まる。

自分の命に代えてでも守りたい弟と離れ離れになるくらいなら、死んだ方がマシ——どれだけ、そんな思いに駆り立てられたらどうか。

それでも、少女はその思いに押しつぶされず、グッと堪えた。

弟から貰った、大小の歯車が中央で重なり合う首飾りを強く握り締めて。

「……うん！ お姉ちゃん、楽しみにしてる！」

姉は涙を流しながら、弟の逞しい言葉に笑顔で応える。

そして最後にもう一度だけぎゅっと抱き締め合うと、姉は弟をコンソールに寝かせ、続き自身もコンソールに横になりコンバーターを装着した。

「よし、全員シフト準備整ったわね」

「それでは、我々も準備を。シフト発動のタイマーを五分後にセットします」

他の人々が全てコンソールボックスに入ったことを確認し、不規則に振動するシエルターに幾度かよろめきながらも、慣れた手つきで自身のコンソールボックスの蓋を解除させる二人のエンジンニア。

そして、皆と同じように二人がその中へ足を入れようとした瞬間——

「う……………あ……………」

唐突に地下シエルターの扉が開かれたと同時に、傷だらけの女の子が倒れこむようにして中へと入ってきた。

「な——」

頭から血を流し右腕はあらぬ方へと向く、「かろうじて生きている」と言っている少女。事態をすぐに把握したらしい女性エンジニアは、すぐさまその少女の元へと駆け寄る。

「くっ、しつかりしなさい！」

「あ……うあ……」

「ひどい怪我が……貴方、別のシエルターから追い出されたのね？」

彼女の腕に頭を乗せた女の子は、今にも意識がなくなりそうな状態ながらも、こくんと微妙に首を縦に動かす。

「逃れようのない破滅を前にして、恐怖に駆り立てられた権力者がエターナル・シフトの登録を無視して無理矢理コンソールを奪う——聞かない話ではありませんでしたが、まさかこんな女の子を放り出すなんて……」

「きつと、絶る思いで第一層を移動してきたのね。それでこんな目に……と、それは今はいいわ。つまり貴方、エターナル・シフト希望者なのね？」

その言葉に、傷だらけの女の子は薄目を開きながら、再びこくんと首を縦に振った。

「よし、それなら……西丘つ！ 一名追加よつ！」

「なッ!? む、無茶なっ！ タイマーは既に掛けてしまいましたし、何より空きのコンソールがもうありませんっ！」

「まだあと四分もあるじゃない！ 愚痴たれてないで早くセットする！ コンソールは予備のを使うわ！」

「まさか、あの不良が見つかったコンソールを使用する気ですか!? 危険過ぎますッ！」

「このままじゃ、どのみちこの子は助からない！ なら、少しでも可能性のある道を選ぶわ！」
 そう言って女性エンジニアは立ち上がると、少女を抱きかかえたまま、唯一誰も入っていないかったコンソールボックスへと足を運び、その中へ少女を横たわらせる。

そして、素早くその頭にコンバーターをセットさせると、そのまま真剣な眼差しで少女へ言葉を投げ掛けた。

「よく聞いて。時間が無いから、最低限のことだけ説明するわ。これから、貴方の意識を肉體から切り離し、こことは違う仮想世界へと飛ばす。その世界で目を覚ましたら、まずはツールボックスを開いてマニュアルを読みなさい。それを読めば、大まかな世界の仕組みとこれから取るべき行動が見えてくるはずよ」

はあはあ、と苦しげに息をしながら、眺めるように女性の言葉を受け入れる少女。

耳に届いているのかも不明であったが、それでも女性エンジニアは構わず説明を続ける。

「あと、絶対に覚えておかなきゃならない注意点を二つ。ひとつは、もう二度とこちらの世界

には帰ってこれないということ。そしてもうひとつ、これから行く仮想世界に人を蘇生する術はない、即ち『死』が存在すること。最低限、この二つは頭に叩き込んでおいて」

駆け足のような女性の説明だったが、それでも少女は何とか意識を繋ぎとめられたらしく、先程と同じように、こくと頷きを見せた。

「主任、追加のセットアップ、完了しましたー」

見計らうかのようなタイミングで、男性エンジニアの報告が上がる。

この時点で、タイムマーは残り一分半を切ったところ。

それに目を向け、「よし」とひとつ頷きを入れた女性エンジニアは、コンソールボックス内のパネルに手を伸ばしながら、少女に最後の質問を投げた。

「それじゃあ最後に……貴方、お名前は？」

「……あ……ゆ……き……」

「ユキ、ね……よし、登録完了。よく頑張ったわね、ユキ。貴方が向こうの世界でかけがえない人生を送れるよう祈っているわ。May Yggdrasil protect you（貴方に世界樹の御加護があるらんことを）」

女性エンジニアはそう言ってユキと名乗った少女の頬を一度だけ優しく撫でると、コンソール内のスイッチを押してボックスを閉ざす。

そして、自身も駆け足で先のコンソールに入り込むと、コンバーターを被り、素早くその蓋

を閉じた。

『エターナル・シフトまで、残り十秒……九……八……七……』

タイムマーの表示を読み上げるよう、電子音の乾いたカウントダウンが始まる。

時を同じくして、より一層強い揺れに襲われたす地下シェルター。

それはまるで、彼女たちを逃すまいとするかのような衝撃の波だったが、それでもカウンターはリズムを変えることなく、正確に時を刻み続ける。

『五秒前……四……三……二……一……』

天井から舞い落ちる土埃は、さながら終焉を前にした大地の汗や涙と言ったところか。

もはやシェルターそのものが崩れるのも時間の問題と言って良い状況の中、カウントダウンはいよいよ終着を迎え――

『――エターナル・シフト、起動』

その音声と同時に、聡真やユキたちの意識は、これまで慣れ親しんだ肉体、そして世界から、さも撃ち出されるかのように別世界へと放たれた。

第一章 仮想世界「ユグドラシル」

「グオオオ——ッ！」

雲ひとつ無い晴天の下。

明らかに人とは違う雄叫びを上げるそいつは、俺の一・五倍はあるかと思われるのでかい
凶体をさらに両手を広げるようにして存分に見せつけ、威嚇するようその場に立ち塞がる。

その鋭く尖った牙や風を纏った長い爪は、戦う術を知らぬ人々の戦意を喪失させるには十分すぎる凶悪さだ。

「またストームベアか……つたく、相変わらずこの草原は面倒くせえな……」

だが、それほどの存在を前にして、普通の人間に過ぎない俺は心底面倒くさそうに溜め息を吐いていた。

それは何も俺の神経が凶太過ぎる訳でも何でもなく、むしろこの世界で暮らす人々の半分以上は俺と同じような反応を見せることだろう。

「はあ……こりゃあ、今日の晩飯はベア鍋だな」

呆れたように呟きながら、俺は右手に持った剣を一度軽く横に振るう。

以前の世界なら持つているだけで疲れそうな、やや長めの無骨な片手剣だが、今の俺にはそ

れこそ身体の一部のような存在。重すぎも軽すぎもなく、振るうのに程好い質量を右腕に感じさせている。

「そら、早く来いよ。おまえらと遊んでいられるほど暇じゃない」

「グアオアアア——ッ！」

俺の挑発にキレた——のかどうかは定かではないが、目の前のやや緑掛かった熊は再度雄叫びを上げるなり、まるで飛び掛かるようにして俺へと向かい一直線に突進してきた。

その凶体のでかさからは想像できないほどの速さで迫り来るストームベア。

だが、そんな相手の攻撃を僅かに横にズレるだけで躲した俺は、そのまま右手の剣を高く振り上げる。

そして——

「じゃあ……なッ！」

そのまま思い切りよく、がら空きとなった相手の背中目掛け、その剣を縦に奔らせた。

「グ、ガッ——」

ストームベアは声を詰まらせながら、一瞬、動きを固まらせる。

その様子を尻目に俺が再び剣を横に振り払うと、同時にそいつは光の粒子となってこの世界へと溶けていった。

「十五匹倒して、得たのが僅かなスキルポイントと金、それに大量のベアの肉……はあ。さっ

さと目的のもん手に入れないと、マジで時間の無駄でしかない……」

華麗な勝利の余韻に浸ることもなく、むしろ涙すら流したくなる感情に襲われた俺は、呟きながら一人身を翻す。

草原を吹き抜ける爽やかな風に靡く、シックなデザインの施された黒に程近いワインレッドのコート。

俺以外に、草原を歩く人の姿は見当たらない。まあ、こんな経験値稼ぎにも金稼ぎにもならない場所、余程のベア鍋好きくらいしか訪れることはないだろう。

……ちなみに言っておくが、俺はベア鍋などまったく好きではない。

「ブロークの野郎、なにが『ソウマなら簡単なお遣い程度の依頼』だ、まったく……午前中歩き続けても、フライング・フェネックなんて姿すら——ん？」

はあー、と俺は再び深い溜め息を吐きつつ、視線を横にずらす。

『キユ?』

するとそこには、先程のストームベアとは打って変わり、俺の膝にも届かないほどの大きさの小動物が存在しており、きよんとした表情でこちらを見ていた。

「……………」

「……………」

不思議な雰囲気(たふよ)が漂う中、俺とその小動物は視線を合わせたまま、暫しの間沈黙し合う。

触り心地の良さそうなふさふさの白い毛。まるでウサギのように長い二つの耳。そして、背中に生えた可愛らしい翼。

そいつはまさしく——

「いたッ！ フライング・フェネック！」

今日ここに訪れてからこれまでひたすら探し求め続けた、フライング・フェネックと呼ばれる魔獣であった。

「——ッ!」

「あ、こら待て、逃げんなッ！」

俺の目が余りに血走り過ぎていたのか、目的のフライング・フェネックはビクッと一度身体を震わすなり、まさに脱兎の如く後ろへ向けて逃げ出していく。

「仕方ねえ、こっちを使うか」

慌ててその後を追いつながら、俺は剣を持っていない左手に意識を向けた。

正確には、左手の先に握られたもの——回転式の弾倉を抱えた拳銃、通称リボルバーに。

「散弾」をセット——」

拳銃というにはサイズの大きいその銃の銃口をターゲットへ向けつつ、俺は静かに言葉を紡いだ。

同時に、シリンダーが自動で回り出し、目的の弾倉が発射口へとセットされる。

「実弾だってそこそこの値が張るんだから、しつかり働いてくれよ……」

走りながら、左手の人差し指をトリガーに添える。

魔弾ほどでないにしろ、散弾を含む実弾系だってそこいらの回復アイテムよりは数段高い。そして何より、このチャンスを逃せば今日一日中、ストームベアと戯れる羽目になるかも知れないのだ。

疲れきった顔で、大量のベア肉だけ持って帰宅——この事態を避けるためにも、こいつを逃がす訳にはいかない。

「——」

意識を集中させる。

幸い、フライング・フェネックと俺の速さはほぼ同じ、しかも目標は一直線に後方へ飛び跳ねて行ってくれている。

横のズレだけ気を付けながら、トリガーに添えた指に徐々に力を込め——

「——いけッ！」

トリガーが完全に引かれると同時に、銃口から一発の銃弾が勢い良く飛び出した。

「キュッ!？」

銃の発射音に驚きを見せたフライング・フェネックは、咄嗟にその身を横へと弾かせる。

——が、放たれた銃弾はすぐさま空中で分解され、無数の弾となって前方広範囲に向けた

攻撃手段と成り変わり、その一部が右へと逃れようとしたターゲットに上手くヒットする。

ダメージは少ないものの、その衝撃に思わず身をよろけさせるフライング・フェネック。

「ハアアッ！」

その隙を突くように俺は一気に距離を詰めると、そのまま通り過ぎる形で目標を斬り抜いた。

瞬間、先程のストームベアの時と同じく、フライング・フェネックは驚きの表情を浮かべたままその身を固まらせる。

そして、『翼狐の羽』というアイテムだけをその場に残し、光の粒子となって消えていった。

「ふー、ようやく手に入ったか」

アイテムを拾い上げつつ、俺は安堵の息を吐く。

俺が鍛冶屋のクソオヤジから依頼されていた品がまさしく、このフライング・フェネックからしかドロップできない『翼狐の羽』という鍛冶アイテムだ。このアイテムを手に入れてくれる代わりに、報酬として戦闘で使用する魔弾を頂く契約を結んでいる。

とはいえ、三時間歩き続けた上に散弾を一発使用した結果、得ることの出来る報酬が『火炎弾』と『水流弾』を五つずつ……あー、なんて割に合わない……

「くそっ、帰ったらブロークに詰め寄って、成功報酬の上乗せをせよらう必要があるな」
悪態を吐きながら、地面を軽く蹴り飛ばす。

今日はもう精神的に疲れた。依頼の品を届けて然るべき報酬を受け取り次第、部屋に戻って一眠りしよう——そう自分に言いつけ、俺は街へと向けて身を翻す。

……が、足を踏み出し歩き出そうとした、その先に——

「グオオオ——ッ！」

相も変わらず、両手を広げ威嚇するようにその場に立ち塞がるストームベアの姿が。

「……………おまえ何だ、俺のこと好きなのか？」

「グ？」

「『グ？』じゃねえよ、つたく……はあ……」

そうして俺は、今日何度目とも分らない心底疲れ果てた溜め息を吐きながら、再び右手の剣を構えた。



「ハッハッハ、そいつあ御苦労なこった！」

「人事みてえにぬかしてんじゃねえよ、つたく……報酬、上乘せだからな」

「わーつたわーつた、散弾に『徹甲弾』もプラスしてやろう」

《魔法王国アース》のやや街外れに位置するとある鍛冶屋。

その店主を担うブローックドルクという名の男は、豪快な笑い声を上げながら俺から『翼狐の羽』を受け取ると、報酬となる銃弾のセットを後ろの棚から具現化させ手渡してきた。

このヒゲ面でバツと見俺よりも二回り近く年上のオッサンであるブローックとは四年前からの付き合いで、人見知りの俺にしては珍しく口数も多くなる仲だ。

今現在、鍛冶屋としてそこまで有名ではないものの、ブローックは元々鍛冶を得意とするドワーフ族の国《ニダル》の出身であり、その腕は確かなものが窺える。報酬として貰った銃弾はもとより、俺の愛銃である『D・L・Sリボルバー（実弾・魔弾両用回転式拳銃）』もブローックによるオーダーメイド製品のひとつだ。

「大体、無骨な武器しか扱ってないこの店で、『翼狐の羽』なんて何に使うんだ？ あれ、主に外見を華やかにするための装飾素材だろ？」

「そりゃ決まってるなあ、勿論『精霊のドレス』のためよ！」

「ああ……あのアンタには全く似つかわしくない、華やかでフリフリしまくりの、魔法少女っぽい衣装の防具か。あれ、まだ作る気でないんだな……」

「たりめえよ！むしろ、俺はあの装束を作るためにここに鍛冶屋を構えていると言っても過言ではない！いや、正確には『精霊のドレス』を着た少女をこの目で見るために、だ！」

「声でけえんだよ、この変態ロリコンが……」

やれやれ、と頭に手を置きながら俺は深く溜め息を吐く。

『精霊のドレス』はブロークが作るうとして、いるオリジナルの防具で、こんな店にまず訪れることの無いであろう女性魔法使い向けの一品だ。しかも、どう考えても小さい女の子向け。今年の初めくらいにようやく作り上げるのに必要となる素材が決まったようで、現状はその素材集めの段階らしい。ゆえに、今回の依頼のように俺にもその作業の一端が回って来たりしている。まあ、この世界では素材さえ集まれば武器や防具の生成は半日掛からず終わるだろうから、捉えようによっては完成間近と言えるのかもしれない。

「かあー、人の夢を変態呼ばわりしたあ、口が悪くなったなあソウマ。会った当初はあんなに可愛かったのによお」

「うるせえ、十三の餓鬼ん時と比べんな。用が無いなら、今日はもう帰るぞ」

「おっと、ちよっと待てソウマ」

「ん？」

俺が踵を返しドアに手を掛けると、ブロークはそれを呼び止めるように声を上げ、そのままカウンターの奥へと消える。

何事かとそのまま待っていると、ブロークは何やら小さな瓶型のアイテムを手にして再び姿を現し、俺に向かってそれを軽く放り投げてきた。

「——っと。これは？」

「そいつは『世界樹の雫』を材料に作った『物質再生・保護剤』だ。劣化した物質を生成当

初の状態に回復させると同時に、ある程度の期間劣化を防いでくれる効能を持っていて、幻とまでは言わないがまあそこそこレア度も高い代物だ。本来、剣や槍などの武器に使用する目的で生成されるんだが……その、だな……」

そこまで説明したところで、ブロークの歯切れが唐突に悪くなる。

何かにつけて豪快なブロークがこのような様子を見せるなど、非常に珍しい。

——そして、その珍しさ故に、付き合いの長い俺にはブロークの思い浮かべている事柄を言われずとも把握することができた。

「……エイリさんの所を持って行けばいいんだな？」

「バレバレ、か……ったく、付き合いが長いのもある意味困りもんだな、こりゃ」

俺の先回りした回答に、ブロークはばつが悪そうに頭を掻く。

エイリドルク——「ドルク」という名が示すとおり、目の前のブロークドルクの奥さ
んで、ブロークと同じくニダル出身の鍛冶職人である。

訳あって今は一緒に暮らしてはおらず、俺も実際に目にしたことはない。

唯、ブローク曰く「自分には勿体ないほど美人で明るい奥さん」らしく、鍛冶職人としての腕も相当高かったらしい。知り合ったのもこの世界に来てからだそうで、一目惚れしたブロークの方から告白、機を見てプロポーズしたんだとか。

「それじゃあ、頼む。ついでに『精霊のドレス』の完成が近いことも報告しておいてくれ。あ

れのデザインは元々、アイツが考えたものだからな」

「ああ、わかった」

ブロークの言葉に了承を返し、俺は鍛冶屋を後にする。

去り際、「いい加減、おまえも早くパートナー見つけんだぞー！」という聞き飽きた忠告が耳に入ってきたが、いつも通り反応は返さないでおいた。



——西暦二〇〇〇年代も一〇〇年が過ぎ、止まることなく時を刻み続けていた現実世界。

度重なる戦争や行き過ぎた科学発展の代償として、人類は幾度となく滅亡の危機を迎えるも、画期的な装置の発明や人々の意識改革によりそれをなんとか免れてきた。

しかしその日、そんな人類の延命策も神々の天罰の前によいよ成す術を失ってしまふ。

『巨大隕石の衝突』——初め、この迫り来る人類滅亡は混乱を避ける目的で一般市民には知らされず、各国の選抜されたメンバーによる対策チームが極秘で回避案を練り続けたそうだが、当時最先端の技術を以ってしても、地球が人類の住めなくなる星に成り変わる未来を変える手立ては終ぞ浮かばなかった。

そうして、一般市民たちの口から現実味を帯びた「人類滅亡」の言葉が発せられるように

なったのが、終末の日から僅か一ヶ月ほど前。

当然のように世界は混乱し、秩序も瞬く間に乱れていく。

唯一、人類の拠り所とされた地球防衛衛星『アイギス』による隕石破壊が行われ、あらゆる人々から大注目を浴びることとなったが、結果的に『巨大隕石の衝突』が砕けた『隕石群の襲来』に変わっただけで、結局「人類滅亡」の未来を変えるまでには至らなかった。

そんな人々が慌てふためいている中、国内の若手研究員で構成された対策チームがこれまでとは一線を画した方法による人類延命策を見出す。

その施策の名を『エターナル・シフト』——人の意識を肉体から切り離し、プログラムによって創り上げた仮想世界のデータへとシフトさせるといふもの。

発案当時、この案に対する賛成者は圧倒的に少なく、むしろ他国の対策チームは鼻で笑っていたらしい。まあ、それもそうだろう。シフトによって意識の無くなった肉体は間違いなく死に至り、生き残るのは強固なシェルター内の半永久的に稼働し続けるコンピューターに登録された意識・記憶データだけ。「延命になっていない」と言われるのも当然と言えば当然である。

ただ、エターナル・シフトを考案したエンジニアたちは、「確かに肉体の死は免れないが、精神は仮想世界に生き残る」と主張した。つまり、「肉体の死」を死と見るか、「精神の死」を死と見るかの違い。肉体のみ生かされている植物状態の人間を「生きています」という考えが存在するのならば、精神のみ生きている状態もまた「生きています」と考えられるのではないか、

というのが彼らの主な意見だった。

後、国内の一般市民向けにこの案が公表された当初も圧倒的に賛同者は少なかったものの、抗いようの無い「滅亡」の文字が目前に迫るにつれて徐々に賛同者が増え始め、最終的にエターナル・シフト希望者は老若男女を含め二千万人以上となる。「どうせ死ぬのなら」といった考えに及んだ人々が多かったのだ。

シフト先の空間として用意された仮想世界は全部で五つ。特に、俺がシフトしてきたこの仮想世界『ユグドラシル』は当時世界中で有名だったファンタジーオンラインゲーム【ヴァルキュリア・ゲート】のデータをベースに開発された世界であり、最終的な避難者は五百万人以上にも上ると耳にしたことがある。とはいえ、シフトに因るものではない既存のAIも存在するため、実際はもっと多くの人がいるように感じられる。

「いらっしやいませー！」

——ブロークの鍛冶屋から歩くこと十五分ほど。

王国の中心街に戻ってきた俺は、冗談にも大きいとは言えない住み慣れた我が家へは足を向けず、一際高い時計塔がシンボルのアース王立魔法学園の方へと歩を進めていた。

「緑豊かなアレフ地区から御取り寄せした新鮮な野菜だよー！」

「そら兄ちゃん、ヴァン地区で有名な工匠に鍛えてもらった刺置いてるよ！是非見てっくんな！」

「王国の都心アースで流行の可愛い衣装揃えてまーす！これを身に着ければ、男性の視線釘付け間違いなし！女性の方、どうぞお立ち寄り下さーい！」

天気の良い昼過ぎともなれば、アースの中央商店街はいつも通りの大いな賑わいを見せる。

——あのエターナル・シフトから、もう間もなく五年。

初めてこの世界で目を覚ましたあの日、自動で割り当てられていた自身の部屋から外に出て目にした風景は今でも鮮明に覚えている。

晴れ渡る空の下、書物やゲームの中でしか描かれていないような石造りの綺麗な街並みに、自分と同じように呆然としている変わった服装の人々。

そんな風景を目にした自分の心の中には、不安よりも期待の感情の方が大きかったように思われる。きっと、他の避難者たちもそうだったろう。

それからしばらくは今までの生活とのあまりの違いに其処彼処で混乱が見られたものの、二ヶ月もしない内に剣や魔法で魔獣を倒しては経験値やお金・アイテムを手に入れるこの世界での生活に人々は慣れていき、次第に商店やら自警団やらの、街を形成するものが自然と出来始め、シフトから一年を迎える頃には王女ステラⅡオルディアをトップに置く《魔法王国アース》が機能し始めていた。

ここだって元は小綺麗な噴水があるだけのただの広場だったのだが、今では視界の七割は人で埋め尽くされてしまうほどの活気溢れた商店街だ。ホント、前を向いた人間の持つ順応性の

高さには、他人事でないながら未だに驚かされる。

「来週はいよいよ、第五回・アース王国闘技大会の開催だな！」

「うおーっ、楽しみで今から眠れないぜ！」

「今回の優勝者は誰だろーねー」

「それは勿論、フレイ様に決まってるわ！ ソロでの出場にして第一回大会から無敗の四連覇……ああ、女の私でもあの美しさに見惚れちゃう」

この世界での記憶を呼び戻しながら商店街を抜け学園の近くまで足を進めると、掲示板の前に群がる大勢の学生たちの姿が目に入った。

「学生たち」といつても、その年齢は下が十二歳くらいから上は四十近い人まで見受けられる。エターナル・シフトによって作成された人格の年齢および性別は、シフト前のものが純粹に引き継がれている。また、シフトしてきた人々の殆どはツールボックスのマニュアルに従い、この世界の仕組みや戦術を身に付けるために、まずはこの王立魔法学園に足を運ぶこととなった。つまり、たとえ何歳であろうが、初めは皆この世界の新生人として学園に通う学生となるのだ。

ちなみに、学園に入學・卒業の概念はなく、自身が必要としたスキルを身に付けられれば一日で学園を去ることもできるし、一度離れた生徒でも他のスキルを身に付けるために再来園する光景も珍しくない。自主的に学びたい授業を選択して受けにくるあたり、中学・高校よりも

大学の講義に近いのだろうか。故に、ここには老若男女様々な人の姿が存在していた。

「そういうや、闘技大会が近いんだっつたな」

『アース王国闘技大会』は王国で年に一度開催される国内でもトップクラスの人気を誇る大イベントのひとつだ。その名の通り国内のあらゆる場所から腕自慢たちが闘技場に集い、その実力を競い合う場となる。

ひとつだけ変わったルールと言えば、魔法使いと物理戦闘者のタッグによる大会という点だろうか。出場者の数も中々のものだが、かのステラ女王も顔を出されるということもあって、何よりその日は観客の数が半端じゃない。それこそ、王国で暮らす人々の九割近くが足を運んでいるのではなからうか。

「優勝者には王女直々に褒賞が授与、また優勝でなくとも実力が認められた者には王国騎士団への入団スカウトも」……まあ、俺には全く関係のないイベントだ」

——で、俺はというと、その残り一割の側の存在に属している。

褒賞に興味もなければ、王国騎士団にも全く興味はない。

そして何より、俺には魔法使いのパートナーがいないし、かといってソロで戦えるなんていう驕りも持ち合わせていない。

そもそも御祭り騒ぎ自体好きではない俺は掲示板から視線を切ると、騒ぐ学生たちを尻目に学園の中へと足を進めた。

——初め、私は自分の身に何が起きているのか、理解することが出来なかった——

「ハアツ、ハアツ——」

自分の口から漏れる、苦しげな吐息。

息を切らしながら、いつしか私は駆け出していた。

向かう先も分からずに。

ここが何処どこかも分からずに——。

「ねえ、あの子……」

「ホントだ、まだ……可哀想に……」

「——ッ！」

通り過ぎた人たちから浴びせられるのは、同情の言葉と視線。

——ここはだめ。

もつと、人がいないところに行かなきゃ……！

「ハアツ、ハアツ——！」

何度もぶつかりそうになりながら、転びそうになりながら、それでも速度を緩めずに、私は走り続けた。

ただひたすらに、人のいない方へと向かって。

まるで、何かの救いを求めるかのように。

「ハアツ、ハアツ……あ——」

そうして、辿り着いた場所。

そこで目に飛び込んできた光景に——私は思わず声を詰まらせ、その場に立ち尽くした。

自分に降りかかる恐怖も忘れて。自分の未来への不安も忘れて。

その、あまりの美しさ故に——。

「きれい……」

——ああ、私はきつと、無意識ながらにこの場所を目指していたんだ。

見ているだけで、不思議と心が落ち着いていく。

そう——その場所で私を待っていてくれたのは、今まで見たこともないほど大きく、それでいて全てを包み込んでくれそうな暖かさを持った——

——「世界樹」と呼ばれる、一本の聖なる樹だった。

「……う……何処だ……？」

アース王立魔法学園に突入してから、ものの五分。

目的地となる学園裏庭へは学園内を突っ切った方が近いから、と足を踏み入れたは良いものの……俺はそこで、完全なる迷子と成り果てていた。

「くそ、学園内にまともに入るのなんて数年ぶりだからなあ……」

余りに広すぎる学園内を当てもなくうろつきながら、溜め息交じりに一人呟く。

「この世界で目を覚ましたなら、まずは近くの学園に足を運ぶべし」——初期所持品のひとつであるマニュアルブックの中でも最初の方に書かれているこの項目だが、もちろん俺もそれに従い、シフト当初この学園の生徒になった経験を持っている。学園内にある程度散策した記憶もなくはない。

ただ……通った期間が余りに短すぎた。どれくらいって、確か一週間くらいしか通っていなかったのではなからうか。

「まあ、魔法使いじゃないし他の物理系スキル鍛える気がなかったから仕方ねーけど……それにしても、闘技大会前だけあって人多いな、ここは」

一度周りを見渡し、その余りの人の多さに思わず舌打ちする。

学園はアース出身者の誰もが足を運んだことのある場所ということもあり、スキルアップ目的以外にも友人と集まって雑談を交わしたりする溜まり場としてもよく利用されていた。

特に闘技大会のようなイベントの前は、アースの街に住む多くの学生たちがここに集まってくる。確かに、学園には飲み物や軽食を販売する店を出している連中も少なくないから、そういった用途で使われるのもある意味当然の結果だろう。

「はあ……こんな所で突っ立ってちゃあ余計疲れが溜まるだけだ。取り敢えず、何処か人の少ない所に移動しよう」

今日は唯でさえストームベアに付き合わされ続けているんだ。こんな商店街と大差ない賑やかな場所など、今は一秒たりとも居たくはない。

まあ、それらの辺りの誰か一人にでも目的地の場所を聞けば問題解決なのだろうが……自慢じゃないが、戦闘時以外における俺の対人レベルの低さは凄まじい。

それに——何よりここでの俺は、違った意味で厄介者に属している。それが故に、話し掛けたことが切っ掛けで険悪な雰囲気生まれなるとも言い切れない。

結局、俺は一際大きな溜め息を吐きながら、人の合間を縫うようにしてより静かな方へと足を進めた。

それからしばらく、俺は人のいない方へいない方へと足を動かしていき、その甲斐あつてと言うべきか、気が付けばこの身は学園でも滅多に人が訪れないような深部へと置かれていた。「明らかに裏庭とは違う場所に来てしまった訳だが……ん？　何か見覚えがあるような気がするな、ここ……」

人もいなければ大した装飾すらされていない唯の廊下の風景に、俺は何となく訪れたことのあるような感覚を覚える。

——いや、勿論そんなはずはない。

数年通っている人ですら訪れないようなこの場所に、ほんの数日しか足を運んでいなかった俺が来ることなどあり得ないはずだ。

散策したことがある、と言っても所詮は学園の訓練施設やら魔法図書館やらに顔を出した程度で、間違ってもこんな奥深くに迷い込んだ記憶はない。

「既視感……いや、それにしてもっとはつきりと……そうだ、確かこの先に——」

訪れたことはないと言いつつ切れるのに、どうしてだかこの先にある光景が何となく頭に浮かんでくる、不思議な感覚。

だが、俺はその疑問すらも忘れ、まるで何かに導かれるかのようにそのまま足を運び続ける。そうして辿り着いた、廊下の最奥にある扉を潜り抜けた先に——

「これは——アースの世界樹！」

隣にそびえ立つ時計塔と並ぼうかというほどに天高くその身を伸ばす、一本の巨大過ぎる樹木を中心とした、それは鮮やかな庭園が広がっていた。

「そうか、世界樹の庭園に繋がる道だったのか……道理で、あんな人が来ないような入り組んだ造りになってた訳だ」

庭園に足を踏み入れながら、俺は一人納得の意を示す。

『世界樹』——正確には『世界樹の枝』であるのだが、この仮想世界ユグドラシルには各国に一本ずつ、計九本の世界樹の枝が存在していると言われている。

世界樹は国にとって何よりも大切な「マナ」を生成する唯一の存在で、魔法を使うにもまた機械を動かすにも、この世界では自国の世界樹が生み出したマナを使用することになる。それはつまり、世界樹を失った国はそれ以降マナの生成が行われず、いずれ魔法も機械も使えなくなってしまうことを意味していた。

それほど重要な存在であるからこそ、ステラ王女や国の幹部たちは学園の領地を広げて世界樹を囲うようにし、かつ容易に人が訪れないような造りにしたのだろう。

俺だって、今日ここに訪れたのは間違いないく奇跡と言っている。

「普段、学園の外からでさえあんなにでかく見えてたし、予想できなくなかったが……間近

で見ると、もはや気圧されるレベルだなこれは」
上を見上げながら、気付けば世界樹の傍らまで辿り着いていた訳だが……こいつは想像以上の迫力だな。

それでいて、世界樹を真下から見上げた時の葉や枝の隙間から光が散りばめられるその景色は、男の俺ですら思わず言葉を失ってしまうほどに幻想的なものである。

「『世界樹』っていう大層な名が付くのも納得の神聖さだな……それこそ、女神でも舞い降りて来そうな——ん？」

——だから。

俺がその直後に起きた予想外の出来事に何の反応すらできなかったことは、ある意味、仕方のないことだっただろう。

「ああーっ……」

唐突に、可愛らしい少女の声のような音が耳に届くと同時に、ガサガサと不自然に揺らめき出す世界樹の葉や枝の数々。

ふむ、余りに幻想的な光景を目の当たりにして、幻聴でも聞こえてしまったのかな。

しかも「女神」だなんて俺が柄にも無いこと口にしたもんだから、世界樹もおかしくて木々を揺らしたに違いない——なんて、むしろ穏やかな気持ちでそんなことを考えていた矢先。

「……わあああつ！」

「——え？」

その世界樹の枝の隙間から、本当に女神が舞い降りて——もとい、落っこちて来た。

「きゃわああああ、避けて——っ！」

見上げる俺の顔面直撃コースで飛び込んでくる、涙目の可愛い女神。

全くの無防備、そして何より上からそんなものが降ってくるなど思いもしなかった俺は、当然避けられる筈もなく。

「ぐおああつ!？」

「はにやうっ!？」

——見事、顔面でその女神をキャッチすることに成功した。

……まあ、後頭部が多少地面にめり込んでしまったが。

「いてて……な、なにが起こったんだ?」

状況を何ひとつ把握できず、俺は頭をさすりながら取り敢えず上半身を起こしてみる。

俺は別に、空から女の子が降ってくるようなファンタジックな展開を夢見る少年ではないし、むしろ「そんな出来事は空想の中でしか起こりえない」なんていう冷めた考えすら持つ、何とも現実主義的な男だ。

しかし、体を起こすと同時に飛び込んできた視界の映像に、俺のそんな夢のない考えは、180℃真逆まぎやくにベクトル変換することとなる。

「あ——」
——気が付けば。

一柱の女神が、可愛らしく俺の膝の上に座っていた——。

「——」
思わず、声も失いながらその存在を見つめ続ける。

向こうもまだ状況を飲み込めていないのか、同じように呆然とした表情のまま俺のことを見つめていた。

「……あ……えと、あの、す、すみません！」

「あ、いや、その、だ、大丈夫か?」

「ふえ!? あ、は、はいっ、大丈夫です……あう……」

ここに来てようやく見つけ合っていた事実(事実)に気付き、俺は咄嗟に口を開きながら視線を外す。相手も何か恥ずかしくなったのか、転がるように俺の膝の上から退いた後、顔を赤くして

俯うつむいてしまった。

「……………」

再び、沈黙が訪れる世界樹の庭園。

女神——もちろん、そいつはそんな幻想的な存在ではなく、背が小さく髪も短めな、至って普通の少女だった。

服装や手にしている短めのロッドを見るに、魔法使用ウイザードだろうか。

ただ、輝く世界樹から舞い降り、そして散りばめられる光の中でぺたんと可愛らしく腰を落としていたその姿に、俺が思わずそう感じてしまったのだ。

ま、まずい……散々さんざんブロックのこと変態ロリコン呼ばわりしてるってのに……

「あ、あのっ……………」

と、自身の感情に危機感と似たものを感じていたところ、目の前の少女が再び顔を上げたかと思うと、拳こぶしを握りつつ「勇気を出して」といった感じで声を掛けてきた。

「え、えと……もしかして、何処かでお会いしましたでしょうか……?」

「え? いや、いや、ない……と思うが……」

「そ、そうですよねっ! すみません、変なこと聞いちゃって……」

「あ、ああ……」

俺の答えを聞き、何処かホッとしたように笑みを浮かべる少女。

俺があまりにじっと見つめてしまったから、そんな考えが浮かんだのだろうか？

まあ、確かに相手が自分のことを知っているのにその逆は知らないとすると、多少なり失礼な気持ちにもなるだろう。安堵する気持ちも分らないではない。

「そのーなんだ、なんでまた樹の上なんかにいたんだ？」

自分でも否定しようのないくらい無愛想な俺だが、どうやら「このまま何事も無かったかのよりに去るのはさすがにないだろう」という考えが浮かぶ程度には救いようがあったらしい。

特に聞きたかった訳でもないが、取り敢えずパツと思いついた質問を投げてみる。

すると、その少女も顔を明るくしながら、嫌がる素振りなく答えを返してくれた。

「えと、自分でもよくわからないんですけど、気が付くと身体がふわって浮いて、そのまま樹の上に——」

「……あー……もしかして、頭打ったのか？」

「打ってないですっ……って言いたいところでですけど、自分で言ってる『もしかして、頭打ったのかな？』って思ってます……はう……」

「い、いや、まあ、まだ混乱してるだけだろ、きつと……んじゃあ、質問を変えるか。ここにはよく来るのか？」

「いえっ、今日が初めて——だと思えます」

「初めて？ よく辿り着いたな……ちなみに、世界樹があることを知ってて来たのか？」

「いえ、全然知らなかったです！ その、実は学園に来たのも今日が初めてで……よく分からないまま彷徨って、気が付いたらここに……」

「迷い込んだ、のか」

「は、はい……恥ずかしながら……」

そう言っつて、少女は「えへへ」とはにかむ。

よくこんなところに迷い込んだな、という思いが一瞬浮かんだものの、考えてみればまさに今の自分がその一例であることを思い出し、それは口に出さなくておく。

ただ、それよりも俺は、少女の「学園に来たのが今日初めて」という単語に少なからず驚いていた。

「まさか学園すら今日が初めてとはな。確かに幼いとはいえ、一度くらいはスキルを学びに来てても良さそうなんだが……マニュアルとか読まなかったのか？」

「あ、『マニュアルブック（アース版）』でしたら、今朝初めて見えました！」

「け、今朝かよ……」

少し自慢気に答える少女に、思わず額に手を添え溜め息を吐く。

この世界で目を覚ましたら、まずはマニュアルブックを開け——これは、エターナル・シフト前に必ずエンジニアの人から説明される事項だ。

普通、そこに書いてある「まずは近くの学園に向かえ」という指示に従い、殆どの人はシフ

ト初日か遅くとも三日以内には学園に足を運ぶ。俺もそのタイミングで学園に行ったが、その当時の学園はもの凄い人数で溢れかえっていたのを今でも覚えている。それを今の今まで無視していたとは……見た目と違い変わり者というか豪胆というか何というか。

「でもまあ、確かに学園に通わずとも暮らしてはいけるか。家は自動で割り振られてるだろうし、この世界じゃ最悪、飯を食わなくても生きていけるし……」

感覚的にかつての世界とかなり酷似しているとはいえ、俺たちはあくまでデータという存在だ。何日も飯を口にしなければ、それが原因で体力が尽きて死ぬようなシステムにはなっていない。但し、「もう何日も物を口にしない」という事実から猛烈な空腹に襲われ続けるのは間違いないだろうが。

まあ、目の前の少女からそんなやつれきった雰囲気は漂ってないし、見たところ十二、三歳くらいだから、近所の人たちがその辺の世話はしてくれただらう。この世界じゃあ、知らない子供を近所の大人たちが面倒見ている風景も珍しくはない。

「あ、あの……」

誰に話すでもなく一人でぶつぶつ言いながら考え込んでいた俺を、初めきよんとした表情で見つめていた少女だったが、ふと何かを思い立ったらしく、やや遠慮気味に声を掛けてきた。「もし迷惑でなければ、このマニュアルに書いてある『初心者向け魔法講義室』の場所を教えてくださいませんか？ この世界には魔法が存在するっていう記述を見て、是非とも魔法を使っ

みたくて……」

「ん？ こ、講義室の場所？ ふむ……」

少女の御願いに、俺はやや額に汗を滲ませながら言葉を詰まらせる。

同時に、ふらふらと空中を彷徨い出す視線——その姿がどうやら嫌がっているように見えただのか、少女はすぐさま願いを取り下げようと両手を振りながら声を上げた。

「あ、あのっ、無理なら大丈夫です！ 一人でも探せると思いますので！」

「あーいや、別に嫌がってる訳じゃない。嫌がってる訳じゃないんだが、何と言うか……」

「……」

言い淀む俺に、少女は可愛らしく首を捻る。

ああ、そんな目で見ないでくれ……なんか、凄く情けなくなるから……

「実は、だな……」

「はい……なんででしょう？」

「……俺も迷子なんだ」

「——」

……ああ。動きが固まった。

そしてこの、庭園中の音すら止まってしまったかのような雰囲気である。

いや、仕方ないだろう、事実なんだから……ぐ、言い訳思い浮かべて余計悲しくなってきた。

「ふふっ……あはははっ！」

そんな沈黙がいつまでも続くかと思われた次の瞬間——俺の目に映し出されたのは、それこそ天使のような少女の笑顔だった。

「くそ、笑うんじゃねー……涙まで浮かべやがって、こいつ……」

「す、すみません、でもおかしくって……ふふっ」

堪えきれない、と言った風に少女は謝りながらも笑顔を浮かべ続けている。

……んだよ、自分だって迷子だったくせに……そこまで笑わなくなったっていいだろう？

少女と話していたからか、俺はやや拗^すねた表情を作りながら子供っぽく視線を逸^そらす。

「ったく……」

でも——俺のその仕草も、きつと無意識にした一種の演技と言えるのだろう。

実際、俺の心の中に怒りの感情など浮かんでいないことは、俺自身何となく分かっていた。

いや、それどころか——

「そら、んじゃあさつさと二人で探すぞ」

「はいっ！」

この少女に笑顔を与えられたことに、不思議と自分も喜びを感じていた——。

「ソウマだ」

「え？ あ——」

端的に述べた俺の言葉に初め少女は疑問の表情を浮かべたが、それが自己紹介だと分かるなり、再び満面の笑顔を浮かべながらその小さな口を開く。

「私、ユキです！ よろしくお願ひします、ソウマさんっ！」



「はあ、遅いわねークロード……何してんのかしら、あいつ……て、噂をしていれば——」

「わりの、リーシア！ 待たせた！」

「遅い！ もう、自分から誘っておいて遅れるなんて、サイテーよ」

「だから悪かったって。ここに向かう途中、ちよつと気になることがあってさ」

「気になること？」

「ああ……ユキのことなんだが……」

「え……ユキに何かあったの!？」

「あーいや、特にユキ自身に変わった様子があった訳じゃないんだ。今もどうやら初回魔法講習を受けてるっぽいし」

「——? なら、いつも通りじゃない」

「ただ、すれ違った生徒が話してただけど……どうも、『男と二人で』講習を受けに行っらしいんだ」

「二人で……?」

「そう。しかも、その男性ってのが……あのソウマらしい」

「ソウマ!? ソウマって、あの剣銃士ソードガンナーのっ!？」

「こ、声で聞いて……濃い赤色のコートを羽織った銀髪の男って言ってたし、まあそのソウマで間違いないだろうよ」

「何であいつがユキと初回講習なんか……気になるわ」

「お、おい、リーシア! 何処行くんだよ!？」

「決まってるでしょ、ユキの所よ!」

「ユキん所たつて、講習終わるまでは話しかけれないだあ、仕方ねえなあつ!」



「す、すみません、ここまで付き合わせてしまつて……あう……」

「ったく……まあ今日はもう大して予定なかったし、別に気にしなくていい。謝ってる暇があったら、さっさと終わらすぞ」

「は、はい……うう……」

俺の言葉に頷きながらも、申し訳なさそうにうな垂れるユキ。

そのユキを斜め後ろに、俺は右手の剣をグツと握り締める。

そして、そんな俺たちの目の前には——

『グオオオ——ッ!』

——もう二度と姿を拝みたくもない、威嚇するよう両手を広げたヤツの姿が。

「まさか、魔法系初回戦闘講習の相手がストームベアとは……もう、運命としか思えん」

「そ、ソウマさん、ストームベアさんが運命の御方なんですか? い、意外です……」

「……おまえは俺をどんな風に見てるんだ?」

天然丸出しのユキの反応に、思わず目を瞑りながら肩を落とす。

何故、俺がこいつと一緒に講習なんぞを受けているのか——この疑問の原因を解くために、今から四十分ほど時間を廻る。

あれから何とか迷子を脱し、無事に講義室へ辿り着いた俺たちは、そのまま初回講習の受付手続きを行った。勿論、受けるのはユキ一人で、俺は受ける気なぞ一ミリたりともない。ユキの受付の完了を見届けたら帰るつもりだったし、ユキの方もそれは理解していた筈だ。

——が、講義室前の受付用パネルと格闘していたユキは、「とにかく『はい』を選んでさやいいんじゃねえか」という俺の助言を律儀に実行し続け、「受講者は一人ですよしいですか？」という質問に『はい』を選んでしまった。恐らく、センサーが俺の存在も読み取ってしまったが故、パートナーありでの受講と認識されてしまったのだろう。

「あ……」というユキの漏らした声に只ならぬ危機感を感じ取ったものの時既に遅し、俺とユキの身体は講義室の中へ強制転送。そのまま魔法系の初回講習が始まり、三十分間に渡る座学が終了、そのまま実戦講習へと問答無用で移行し、今に至る。

「はう……私って、昔からドジなんです……すみません……」

「だから、気にすんなったつただろーが。……そのーあれだ、俺もちょうどパートナーとの連携確認したかったし」

「あ、ああ。だから顔上げる。真剣にやらなきゃ身に付かねーぞ」

「ソウマさん……はい、分かりました！ 精一杯、頑張ります！」

俺の言葉でようやく気を持ち直したのか、ユキが両手を胸の前で握り締め気合を入れる。

実際、ストームベア相手に連携も何もない訳だが……まあ、そこは察してくれ。

『さあ、先程習得した補助系魔法を前衛攻撃者に掛けるのだ！』

何処からともなく聞こえてくる教員の野太い声。

この教員は俺たちのようにシフトによって作られた意識データではなく、初回講習を教えるためのプログラムのみで構成された、言わば精神のないAIだ。一応、「三十八歳独身、濃い髭が特徴のガタイのいい男性教員」という無駄な設定があるが、正直全くどうでもいい。

「はいっ！」

そんな教員AIに律儀に返答するユキは、手にしていたロッドを前に構えながら俺に向かって魔法を唱える。

「えと……《攻撃補助魔法》っ！」

声を放ち、ユキの身体から柔らかな光が発せられる。

同時に、周囲を囲うよう赤み掛かった光が俺を取り巻いた。

魔法系の初回講習では、まず魔法の基礎と言わなければならない補助系魔法の習得が行われる。

ちなみにこの初回講習にて取得できるものとしては、今ユキが放った対象の攻撃力を上げる【イド】、防御力を上げる【ナーク】、そして敏捷力を上げる【ムルガ】の三つ。但し、こいつ

らは使用するマナの量こそ少ないが、補助魔法スキルのレベルが低いうちなんかは三%程度しか上昇率がなく、エターナル・シフトから五年が経った今、この魔法を使っている魔法使いはゼロと言っても過言ではなかった。俺も実際に使われたのは初めてだ。

……まあ、パートナーがいけない期間が圧倒的に長いのだから、ある意味それは当然なんだが。『上出来だ、ユキくん！ さあ、目の前の魔獣に攻撃だ、ソウマ！』

「行けーっ、ソウマさんん！」

「へいへい……」

ノリノリなユキの声援に小声で返事をしつつ、俺は剣を右に突き出したまま前方へ駆け出す。実戦「講習」ということもあって、目の前のストームベアは一切動く気配がない。本来初回講習を受講するようなレベルの人たちからすればありがたいのだろうが、ストームベアハンターと化した今の俺からすれば、動こうが動かないが大した差はなかった。

「フッ——」

俺はそのストームベアの左脇辺りに潜り込みその場で身体を時計回りに素早く回転、隙だらけの敵の腹部に剣を当て——そのまますれ違うように斬り抜ける。

『グ、オ——』

そして一瞬の間、これまでの例に漏れず、ストームベアは光の粒子となって散っていった。

「す……凄いです、ソウマさん！ たった一撃で倒しちゃうなんてっ！」

「いや、あんぐらい誰だって普通にできる。大した事じゃない」

「そうなんですか？ でも、凄いかっこよかったです！」

「そ、そうか……」

「はいっ！」

満面の笑顔で語る、嘘偽りのない心からのユキの言葉。

……まあ、女の子から「かっこいい」と言われて、悪い気はしないかな。

「……?? ソウマさん、何かお顔の色が赤く——」

「——ッ!? さ、さっさと次のミッションこなすぞ！」

「えっ？ あ、は、はい！」

自分でも熱の上昇を感じていた顔をさっとユキから離し、俺はすぐさま再度出現したストームベアに身体を向き直す。目では確認していないが、どうやらユキも俺の言葉を受け素直に意識を講習に戻したようだ。

いいタイミングで現れてくれた、ストームベア。少しだけ、おまえのこと見直したぞ。

「行きます、《敏捷補助魔法》ッ！」

「ハアッ！」

『グ、オ——』

……とはいえ、一瞬で霧散させるんだがな。

それから数体のストームベアを相手にし続けること約二十分、ようやく教員の『よし、これで講習は終了だ!』という号令が下され、俺とユキの魔法系初回講習は無事に幕を閉じた。

「……はあ……何やってんだよ、俺は……」

「ソウマさん? どうかされました?」

「あーいや、気にしなくていい……」

「……?」

——その後、ユキの「わー! ソウマさん、凄いいっ!」というある種の回避不能なオリジナル魔法に当てられ、実戦講習用のストームベア如きに散弾はおろか徹甲弾まで使ってしまった哀れな俺。

く、こんな子供に乗せられるなんて……長期に渡るソロ活動で余程他人の情に飢えていたのか、それとも俺が実はブロークに負けず劣らずのロリコンだったのか……ああ、せめて前者であってくれ……

「えと、今日は補助系魔法をいっぱい使ったから、補助魔法のスキルポイントがたくさん取得できたんですね!」

「ん? ああ、そうだな。そうやってスキルポイントを溜めていくことで、その系統のスキルレベルが上がる。で、スキルレベルが上がれば既得の魔法の効果や詠唱速度が上がったり、同系統の新しい魔法を覚えたりできる。俺たちみたいな物理戦関係のジョブでも、上がるスキルレベルの名称が『補助魔法』から『剣技』や『槍術』に変わるだけで、その仕組みは同じだ」

二人で学内をゆっくり歩きながら、座学の復習をするように確認してきたユキの言葉に俺は首を縦に動かす。

この仮想世界ユゲドラシルには、自身の強さを表すものとして、「パーソナルレベル」と「スキルレベル」の二つが存在する。

「パーソナルレベル」(通常、単に「レベル」と言ったらこれ)は体力や力、素早さなど各々の基礎能力に強く紐付いており、これが上がれば純粹にそれらの数値も上昇する。但し、そのレベル上限は数値にして五十とそれほど高いものではなく、毎日適度に魔獣と戦闘を行ってポイント、即ち経験値を稼いでいれば、一年から二年の間で大体そこに達してしまう。シフトから五年も経った現状、この世界の半分以上の人はレベル上限に達しているのではなからうか。俺も当然、パーソナルレベルは既にカウントストップしている。

一方、「スキルレベル」だが、こちらはいわゆる戦闘技能の熟練度を示す値。先の俺の言葉にあった通り、これを上げることで対象系統の魔法や戦術を習得し、同時にそれらの効果を高めることにも繋がる。また、パーソナルレベルと決定的に違う点として、スキルレベルは上限

が未だ確認されおらず、最低でも百はあるというのが巷での見解。あれだけ鍛治ばかりしているブロックですら「鍛冶職人のスキルレベル七十二だが、上限って気配はしねーな」と言っていたから、その噂もある程度信頼性の高いものと見て良いだろう。こういった背景もあり、この仮想世界ではパーソナルレベルよりも伸び代のあるスキルレベルの方が重要視される傾向にある。

「それじゃあ、今後はまず補助魔法のスキルレベルを上げるよう頑張ればいいのでしょいか？」
 「いや、それは止めた方がいい……あーいや、考え方的には間違っていないんだが、補助系魔法は今のところ、あらゆるジョブのスキル中でも最弱と言われている。そのくせ、敵にダメージを与えるものがないからスキルポイントが回復系魔法と同等かそれ以上に稼ぎ難い。それこそさっきの初回講習で得たポイントがむしろ高い方だ。だから、今のアースで補助系魔法使いはまず見かけない、というかここ数年見たことがない」

「そうなんですか……それは残念です」

「なんだ、まさか補助系魔法使いになりたかったのか？」

「あ、いえ、そこまで想っていた訳ではないんですけど……ただ、補助系魔法ってパートナーを支えることを一番の目的とした素晴らしい魔法だと思うんです。だから、今後も使っていけたらなーと……」

「……………」

本当に残念そうに、ユキはやや俯きながら無念を告げる。

そしてそんなユキの姿に、俺は驚きを隠せないでいた。

五年が経ったとはいえ、俺たちは元々剣や魔法など全く関係ない世界からシフトしてきたのだ。普通、武器を華麗に振り回したり派手な攻撃魔法を放ってみたりしたくなるものだろう。結局のところ、補助系魔法使いが絶滅危惧種になってしまった最大の原因もそこにある。

にも拘らず、こいつはそれ以上に、自分よりも他人を輝かせる補助系魔法に魅力を感じると言ってきた。

恐らくこのユキという少女は、根っこの部分からして物凄く優しいやつなんだろう。それこそ、道端の小さなアリですら踏まないよう気を付けて歩くくらいに。

そうでなければ、この夢に溢れた世界で、自ら望んで補助系魔法使いになりたいなどと思えるはずがない。

「あ、あのー……どうかなされましたか、ソウマさん？」

「いや……」

そんな驚きの感情を込めて送っていた俺の視線に、頬を若干赤くするユキ。

彼女の問いに俺は「なんでもない」と答え、そのまま言葉を続ける。

「魔法使いがなれるジョブは三つ。補助系魔法使い、攻撃系魔法使い、それに回復系魔法使いだ。但し、座学でも習った事項だが、ジョブを変更したら以前のジョブで習得した魔法は使え

なくなる。勿論、初回講習で覚えた補助系の魔法もな。さつきは「補助系魔法使いを目指すのは勧めない」と言ったが……まあ、あくまでそれは一般的意見だ。別にそれに縛られる必要はない。最終的に自分がやりたいと思った道を選べばいいんだ。他人の目なんか気にせずに！」

「王国騎士や傭兵、ハンターなどを目指している訳でもない限り、別にこの世界で必ずしも強くなる必要はない。普通に暮らしていくだけであれば、それこそブロークのように戦闘系のスキルを磨いてなくても十二分にやっていける。」

補助系魔法使いだって、俺みたいに素材集め等の依頼をこなしている連中からすれば「作業が楽になる」という点で他の攻撃系魔法使いや剣士などと組むのと大差ない。そんなスキルの強さより、人間性の方が重要視される。そういった観点からすれば、ユキならば俺よりも上手くやっていける筈だ。

「せっかく、エターナル・シフトで『隕石群の襲来』の先の人生を与えられたんだ。やりたいことをやればいい。何なら、最強の補助系魔法使いを目指したっていいんだぜ」

「最強の補助系魔法使い、ですか……ふふ、それ良いかもです。そうですよ、運良くこの世界での生を与えられたのだから、自分のやりたいことをやってみなきゃ、ですよね！」

俺の言葉に納得できたのか、ユキは笑顔でそう頷いた。

きつとこいつは、初めこそ攻撃系魔法や回復系魔法を習得し使ってみるかもしれないが、最終的にやっぱり補助系魔法使いを選ぶのだろう。

優しい性格からして攻撃系魔法使いにはどう考えても向いてないのは当然として、回復系魔法使いは仲間が傷ついて初めて仕事が回ってくる存在だ。それよりも、仲間が傷つかないよう事前に働ける補助系魔法使いの方が、俺から見てもユキには合っていると思う。

まあ何れにせよ、この先どう生きていくのかはユキの自由だ。ここに来て学園に初めて足を運んだのも、少なからず自身の世界を広げる目的があった筈。俺如きがそんな少女の未来の可能性を狭めるなど、以ての外だ。

「生活に必要な費用程度ならどんなジョブだろうと大抵どうにかなるだろうから、それはあまり気にしなくていい。まあ、最悪仕事が見つからなければ……俺がたまにパートナーを依頼してやらないこともない」

「ソウマさん……ありがとうございます。ふふ……ソウマさんって、ばつと見ちよつと怖い雰囲気がありますけど、でも本当はとても優しい方なんですわね」

「……………は。」

半歩後ろから聞こえてきたユキの突然の言葉に、俺は思わず足を止め啞然とする。

「だって、ソウマさんあんなに強いにも拘らず、文句も言わずにここまで私に付き合ってくれました。それに……これからの道を示してくれた時も、私の気持ちを汲み取ってくれました。

本当に、今日出会ったのがソウマさんで良かったです」

「か、過大評価し過ぎだ、馬鹿が……今日はもう暇だったし、さっきの話も別に自分の思っていることを言ったまで。だ、だから、後は自分で何とかしろよ」

「はいっ♪」

嬉しそうに微笑んでいるユキに構わず、俺は再び脚を動かす。

好く想ってくれていたのはまあ嬉しいが、それを面と向かって言われると恥ずかしいとか反応に困ると言うか……くっ、これじゃあどっちが子供だかわかんねえじゃねーか。

「はあ……最近の子供は侮れねーな……」

そうして俺は「ブロークの様には絶対になるまい」と自分に喝を入れ直しながら——無意識に、後ろのユキに合わせて歩調を遅らせるのであった。



魔法講習を終えた後、俺はブロークからの依頼を果たすべく、ユキを連れた状態のまま、本来の目的地であった学園の裏庭へと訪れていた。

「悪いな、付き合わせちまって」

「いえ、全然大丈夫です！ ちょうど、学園内の探検もしてみたかったですし……それにしても、ソウマさんはここに何をしに？」

「まあ、もうちよっと先行きやわかる」

先程いた世界樹の庭園に比べれば壮大さには欠けるが、この裏庭も中々に広い。

俺はユキより半歩前が出る形で、その裏庭の中を真っ直ぐ歩き続ける。

「あー、見えたな。あれだ」

「あれって……もしかして……」

そうして、数分後。

無事目的地に辿り着いた俺の言葉に、ユキは少々驚いた表情を浮かべる。

「これ……アンタの旦那からの贈り物だ」

特にユキに対して説明はせず、俺はそう言葉を告げながら、ブロークから預かっていた『物質再生・保護剤』を右手に具現化させた。

日の光に当たり、小瓶の中の液体は綺麗なエメラルドグリーンを醸し出しながらゆらゆらと揺らめいている。

「すごいや『精霊のドレス』の完成が近いんだと。あの様子じゃあ、もしかすると今週にでも出来上がるかもしれないな」

先程のブロークとのやり取りを思い返ししながら言葉を発する。

……が、それに対する反応は全く返って来ない。

代わりに響くのは、時折吹き抜ける爽やかな風とそれに揺らされる木々の音だけ。

まあそれも当然、何せこの場には——俺とユキしか人がいないのだから。さて、と……」

小瓶の蓋を開けながら、俺は右手に落としていた視線を再び前へと戻す。

俺の目に映るのは、ちょうど自分の腰くらいの高さがある灰色の大きな石。

そして、その中央には——

『最愛の妻、エイリッドルクに安らかな眠りを』

今は亡き最愛の人へ向けた、ブロークの祈りの言葉が彫られていた——。

「本来ならブローク本人が来るべきなんだが、まあ、察してやってくれ。あいつ、あの図体にして意外と泣き虫だから……って、俺に言われるまでもねーか」

語りかけながら右手を軽く振り払い、小瓶の中に入っていた液体をその石——エイリの墓に浴びせ掛ける。

保護剤の織り成す緑色の淡い光の中で、多少劣化の見られていたその墓石は見る見ると修復が施され出すと、数秒後光が消える頃には、まるで生成当初のような状態となってそこに存在していた。

「エイリッドルク……これって、お墓ですよ？ その……ソウマさんのお知り合いの方なの

ですか？」

「いや、俺の知り合いの奥さんってだけで、実際に会ったことは一度もない。できれば、一度くらい御目に掛かりたかったんだけどな……」

「そうなんですか……ちなみに、エイリさんはどうしてこんなことになってしまったのでしょうか？ もし良ければ、教えて頂きたいのですが……」

「ああ、それは別に構わない。エイリさんは知り合いの鍛冶職人・ブローク・ドルクの奥さんなんだが、初め二人はこの魔法王国アースではなく、鍛冶の国ニダルにシフトして来たんだぞうだ。その後、こっちに居を変えることになったんだが——」

ブロークが鍛冶の国ニダルからこの魔法王国アースへ居場所を移した時点で、既にエイリの姿はこの世に無かった。

ニダルはアースの南方やや東より存在する国——いや、正確には存在していた国である。

元々、今俺がいるこの仮想世界『ユグドラシル』には、シフトしてきた時点で既に《魔法王国アース》・《神国ヴァン》・《妖精国アレフ》・《鍛冶の国ニダル》・《機械国家ミッドガル》・《超人の国ヨーツ》・《水国ニヴル》・《死の国ヘル》・《炎国ムスベル》という九つの国が存在していた。

とはいえ、あくまで国としての境界があるくらいで、シフト当初はどの国の人々も同じように、近場に出現する魔獣を倒してはお金を得る生活を個々で必死に行っていただろう。

それから月日が経ち心に余裕が生まれてくると、この世界で生きることには必死だった人々は、今度は「如何にして生きるか」という考えを浮かべるようになる。

ある者は楽しんで生きようと、そしてある者は楽しんで生きようという思いの下、人々は徐々に周りとの繋がりを深めていき、店を立ち上げる者が現れ、それに伴い材料集めや店の応対を手伝う者が現れ、さらには他国の商人と取引を行う商人やその護衛を生業とする者も見られるようになった。

そうした人の「欲望」は世界の発展を大きく加速させる要因となったが、それと同時に破滅への一歩を踏み出させることにもなる。

エターナル・シフトからももう間もなく一年が経とうかという頃、世界中の人々を震撼させる出来事が、この世界で発生した。

『機械国家ミッドガルの軍勢、ニダルに侵攻』

——それは、シフト以降におけるこの世界で、史上初となる戦争の勃発だった。

ミッドガルは現国主・ヨルムガンドを大将とする銃武装の軍勢で隣国ニダルに攻め入ると、僅か一日でニダル国内における三分の一の領域を占拠。そもそも、ニダルの国の人々は鍛冶職人が殆どで戦闘スキルを磨いている人が少なかったこともあり、戦いらしい戦いも起き

ぬまま、三日後にはその全域がミッドガルによって占領され、鍛冶の国ニダルはこの世界からその名を消すこととなった。

「戦争……」

「そうだ。結局、この戦争はミッドガルとニダルの二国間のみのもので終結を迎えたが、この事件は世界中の人々に二つの重要な事実を思い知らせるに至った」

ひとつは、戦争の勝利が国を発展させるのに最も効率的な手段であるということ。

実際、ニダルを占領したミッドガルは莫大な資金や経験値を獲得したと同時に、鍛冶精錬所などの鍛冶スキルを磨くための施設等も手に入れ、その国力を大きく底上げする結果となった。そしてもうひとつは——自分たちの国も、いつ攻め入れられてもおかしくない状態にあるということ。

この状況にいち早く行動を起こしたのが、魔法王国アースであった。

当時、既にアース国内で女王の座に就いていたステラⅡオルディアは、ニダル滅亡の知らせを受けると直ちに、隣国の神国ヴァンおよび妖精国アレフに三国の統合を提案。元々、この三国は位置が非常に近いこともあって人々の往来も盛んであり、互いに戦争を仕掛けるような考えは国民含めて全く持っていないなかったこともあって、三国統合案には両国ともすぐさま了承を示した。

結果、ニダル滅亡から二週間後にアース、ヴァン、アレフは正式に統合を発表。アースの国

力が最も大きかったことと三国の中央に位置していたことより、ヴァン、アレフがアースに無条件降伏する形が取られ、現在の魔法王国アースの領土が出来上がる。これにより魔法王国アースの国力は世界最大のものとなり、ミッドガルですら迂闊に手を出せない状況を見事作り上げた。

またこの方法を参考としたのか、その一週間後にはアースの南西に位置する氷国ニヴルと死の国ヘルが統合し《死水の国ニヴルヘル》も新国として打ち立てられた。

「とまあ国の情勢はさておき、母国を失ったニダルの人々は、その後各国へ散らばることとなる。ミッドガル侵攻時の降伏勧告を受け入れそのままミッドガル国民となった人々が約半数、またニダルを脱出しアースやヨーツなど他国にその身を移した人々が三割程度。そして残りの人々は——ミッドガルの侵攻に最期まで抗戦し、体力が尽きると同時にこの世界から姿を消した」

「そんな……」

ブロークの妻エイリは、まさしくその最期の徹底抗戦組に属していた。噂によると、そのエイリ含むニダルの抗戦組の最期は凄まじかったらしく、皆が自分で生成した爆弾を抱えて突撃、ミッドガルの軍勢に大きなダメージを負わせながら各自散っていったそうだ。

ミッドガルがニダル占領後しばらく動きが取れなかったのも、その時失った戦力と何より爆死する人々を目の前にした兵の士気を取り戻すのに時間を要したからだと言われている。

奇しくもその時間が、国の統合など他の国々が今後起こりえる戦争に備えるための時間稼ぎとなった。

「そうだったんですか……みんな滅亡の未来から逃れるべくエターナル・シフトをしてここに来たのに、どうして戦争なんか……」

「確かに、そうだな。とはいえ、特に明確な支配者のいなかった当時、『戦争しよう』というやつが一人でも現れれば、共闘するにしろ敵対するにしろ、他の連中も『戦争』という舞台上に上がらざるを得なくなったんだろう。蹂躪される様を黙って見る訳にもいかないからな」

これはある意味、剣と魔法の世界だからこそ余計に致し方ないことだったとも言える。

ちなみに、ブローク本人は当時、武器の取引が目的で何人かの鍛冶仲間と共に魔法王国アースへ足を運んでいたらしい。戦争の勃発を知りすぐさまニダルへ引き返そうとしたそうだが、ブロークがその事態を把握した時点で既にニダルは領域の半分近くをミッドガルに占領されていて、ニダルの滅亡は目に見えた状況だった。それでもエイリの元へ行くとしたが、仲間たちと何よりエイリ本人に必死で止められ、泣きながらアースに残ったと昔本人の口から聞いたことがある。

その後、ブローク含むニダルからの避難者たちをステラ王女は快く受け入れ、一定期間の生活資金と住処を分け与えると同時に、アース王立魔法学園の傍らにこのアース王立霊園を用意し、ブロークたちに提供して下さったそうだ。

「ブロークさん、悲しかったでしょうね……」

「ああ……ただ、誇りにも思ってたよ。『あれ以来、未だ大きな戦争が起こっていないのも、あの時エイリたちが生き残った人々の幸せを願い、決死で時間を稼いでくれた御陰だ。俺は本当に最高の奥さんをもらった』ってな」

「ブロークさん……そうですわね！ 私も、是非そんな強い女性になれたらと思います！」

「そうか……そうだな。さて、用は済んだし、そろそろ戻るか。今度はブローク本人に来るよう言うておく。まあ、気長に待っててやってくれ」

旦那であるブロークからの依頼とはいえ、見たこともないやつに長居されても気分の良いものじゃないだろう。

俺は最後にエイリの墓石へそう言葉を掛けると、自身の部屋へと戻るべくユキと共に踵を返した。



思わぬストームベアハンティングに世界樹の庭園、そこでのユキとの出会いから魔法系の初回講習と、予想外続きたった今日一日。

ユキと二人で正門に辿り着いた今では既に日も傾かたむいており、王国の街並みは鮮あざやかなオレ

ンジ色に染め上げられていた。

「無事に正門まで脱出できましたね！」

「脱出っておまえ……まあ、あなたが間違いないじゃねーけど。で、こっからは一人で帰れんな？」

「はい、大丈夫です。国内地図の見方も教えて頂きましたし、ここからなら遠くないので」

「そうか」

俺の家とユキの家はここからだ逆、とまでは言わないが、それぞれ別方向へ足を踏み出さなければならぬ。

まあ、魔獣ヒビキテイル使い擁する死水の国ニヴルヘルと戦争状態にでもならない限り街の中に魔獣は入ってこないし、アース国内でもこの辺りは治安が特によいので心配はないだろう。

「じゃあ——」

波乱尽くめだった一日もようやく終わり。

俺は部屋で疲れを癒すべく、ユキに別れを告げ帰路につこうとしたのだったが——どうやら波乱の風は、俺をまだ逃がすつもりはなかったようだ。

「ソウマ！ てめえ、どういふつもりだ！」

「ユキ！ 大丈夫っ!? 何かされなかった!?」

「ただならぬ雰囲気男女二人組に、道を塞がれるような形で俺とユキは呼び止められた。こんな場所で大声を上げるもんだから、一斉に多くの視線が俺らに浴びせられる。」

「……ああ？ 誰だ、おまえ？」

「うるせえ、俺のことはどーでも良いんだよ！ このロリコン野郎！」

「ろ、ロリ……」

「ってクロード、アンタは喧嘩腰過ぎ！」

「あいたっ！ ちょ、リーシア、俺はユキが心配でだなあ……」

「嘘つくな、アンタ真っ先にソウマに突っ掛かっていったじゃない。この単細胞」

「な、なにおう！」

「なによ！」

「……あー、夫婦漫才なら余所よそでやって欲しいんだが」

「誰が夫婦だ（よ）！」

息びつたり、声を揃えて反論する目の前の男女。

戦士と思しき男の方は、身長は俺と同じかやや低いくらいで男にしては髪が長め。

一方、女の方は男と逆と言うべきか女性にしては身長が高く髪も短めで、装備している外装から察するにユキと同じ魔法使いマジックユーザーだろう。

年齢は二人とも俺と同じくらいと思われるが……少なくとも俺の方は、両者の顔に見覚えは

なかった。

「この馬鹿がいきなり怒鳴り散らしたのは謝るわ。私も大声で騒ぎすぎた、ごめんなさい。ただ……今日、貴方が何故ユキと一緒に行動していたのか、その理由を教えてください。——学園で良い噂を聞かない、『剣銃士のソウマ』がユキといた理由をね」

「え……ソウマさんが……？」

口では謝りつつも警戒を解かない女の言葉に、そもそも状況を掴めていないユキも驚きの表情を浮かべる。

「なるほど、そういうことか……」

その横で、俺は一人納得の言葉を漏らしていた。

ある事情があつて、俺はこの学園で、特にいくつかのグループから厄介者として祀り上げられている。俺と話した事もないやつらにすら「剣銃士のソウマとは関わるな」と言われている程に。

で、ユキの知り合いないし彼女の保護を担当していたと思われる目の前の二人は、そんな俺とユキが一緒にいることをどこからか聞きつけ、血相けつそうを変えてこの場に飛んで来たのだろう。

俺が逆の立場だったとしても、同じ行動を取ったかもしれない。

「こいつとは偶然、知り合っただけ。一緒に行動してたのも成り行きだ。詳しいことは本人から聞け。じゃあな」

「え、あ、ちょっと——」

「ま、待て、ソウマ！」

質問の答えだけを端的に述べ、俺は再び足を動かしその場を後にする。

これ以上俺がここにいっても、互いにとって、そして何よりユキにとって嫌な思いしかなかった。それに——詰め寄ってきた二人に対して、俺はさほど嫌悪感を抱いてはいなかった。

むしろ、陰でこそそと悪口を言われ続けてきた俺からしてみれば、これだけ真っ直ぐにぶつかって来るやつは好感を持てる方と言って良いかもしれない。

少なくともユキを心配していたのは確かなようだから、後は任せればいだろう。

「はあ……つたく、今日はとんだ一日だったな……」

ユキたちを背に、俺は小さく眩きながらも大きな溜め息を吐く。

……今日はもう、とにかく疲れた。早く帰って、さっさと寝よう。

「ソウマさん！」

と、そんな俺の背中目掛けて、まだ幼さの残るユキの声が飛んできた。

距離は若干離れていたが、互いにまだ十分姿が見える距離。

「何かと俺は足を止め、半身だけ後ろに振り返る。」

すると——

「今日は、ありがとうございました！ ソウマさんに会えて、本当に良かったです！」

ここからでも分かるくらいに満面の笑みを浮かべながらそう告げる、天使の様なユキの姿が俺の目に映し出された——。

「……ああ」

向こうに届くかどうかとも定かではない小さな返事を返しながら、俺は再び身を返し家へと歩き出す。

今日がいつもの倍近く疲れた日であったことは間違いない。

だが——心なしか、帰路につく俺の足取りは軽いように思えた。



その日、俺は夢を見た。

ドジで、間抜けで、要領悪くて——

それでも、明るく一生懸命頑張る少女の——

この上なく——悲しい、夢を——。

*

『——May Yggdrasil protect you (貴方に世界樹の御加護があらんことを)』

「ん……」

まるで現実世界での毎朝と同じように、私はこの世界で初めてその臉まぶたを開けた。

「ここが……仮想世界……」

ベッドから身を起こすと、そこはぬいぐるみに埋め尽くされたいつもの私の部屋ではなく、あまり物は置かれておらず、かといって虚しいとも感じさせない、やや赤み掛かった茶を基調とした部屋の風景が広がっていた。

視線を落としてみれば、自身も見なかったことのない服装に身を包まれている。

「取り敢えず起きて……きやうっ！」

ベッドから出ようとした私は、見事に顔からびたん！ と床にダイブしてしまった。

どうやら、エターナル・シフト前の私より、若干背が小さくなっているらしい。

思ったタイミングで足が地面に付かず、前のめりになってしまったのだ。

「あう……シフトしてもドジが治らない……と、それはさておき、何をすれば——あ、そだ！ マニュアル読まなきゃ！」

シフト前のエンジニアさんの言葉を思い出し、私はツールボックスにあるマニュアルを見なきゃと急いで起き上がる。

「えーと、ツールボックス、ツール……ボックス……」

……ツールボックス？

『ツールボックス』って、何処のことだろう？

この引き出し……は違うか。

じゃあこつち？ ……はう、何も入ってない。

あれ、こつちかな？

……………。

え、えと、じゃあ、じゃあ——

「あ、あった……」

それから一時間近くの間、部屋中の引き出しという引き出し、拳銃にはベッドの下にまで潜り込み、ようやく私は——「ツールボックスというのは、物理的に存在しているものではないのでは？」という考えに至ることができた。

そこで部屋の片隅に置かれたモニターに気が付き近寄ってみると、突然目の前に半透明のパネルが展開、恐る恐るそれに触れるとそのモニターにメニュー画面が浮かび上がった。

そこには私が探し続けてやまなかった「ツールボックス」の文字もあったため、その欄に触れ「マニユアルブック（アース版）」を選択すると、まるで召喚したかのように目の前の空間にマニユアルブックが構成され、私は遂にそれを手にすることができたのだ。

ちなみにマニユアルを読んでわかったことだが、モニターのないそれこそ街中のような場所でも、メニューを開こうと意識して手をかざせば、目の前にメニュー画面がホログラフィーとして展開され、今回と同様のことが行えたようだ。

恐らく、このツールボックスの開き方はシフト前に説明があったのだろう。私はシフト時にそんな余裕が無かったため、説明を受けられずにこのような事態になってしまったと思われる。何れにせよ、これで私はようやく先へと進めそうだ。

「えっと……『この世界で目を覚ましたなら、まずは近くの学園に足を運ぶべし』……ふむふむ、そこに行けばこの世界の概要と色々なスキルを身に付けられるんだ」

簡単な世界観はマニユアルにも書いてあったけど、どうやら詳しいことを知るためにもまずは学園に向かわなければならぬらしい。ここでは、生活するのに必須となるスキルの講習も行われると書いてある。

「天高くそびえる時計塔と世界樹が目印です」か……よし！ それじゃあ、早速学園に行っ

てみよう！

ここでじっとしてても仕方がない。

みんなだつてシフトしてきて間もない訳だし、取り敢えず外に出て周りの様子を確かめつつ学園に向かおう！

私はぐつと両手を胸の前で握り自分に活を入れると、いよいよ以って外へと足を踏み出した。

「わあ……綺麗な街並み……！」

外に出ると、そこには石造りの建物や噴水などが建ち並ぶ綺麗な景色が広がっていた。

地下シェルターからシフトしてきたこともあり、晴天の空から照らされる光が眩しくも心を躍らせる。

「ふわ、もうお店がある……先行してシフトした人たちが開いたのかな？」

エターナル・シフトをしたタイミングは、人によって若干のズレがある。私なんかは間違いなく最終組で、一番早くシフトした人たちと比べると二、三日の遅れがあるだろう。

……でも、二、三日程度で、お店なんか開けるものなのかな？

「うーん、まあ気にしてもしょうがないか。取り敢えず、学園に向かわなきゃ」

私は頭を切り替え、学園へと向かう道を探す。

……とはいえ、どうもこの辺りは街の中心地なのか、選べる道の選択肢が多い。こういう時は人に聞くのが一番。なにせ、迷子になった経験多数の私が言うのだから間違いない。

「すみません！」

私は近くにあった露店のおばさんに声を掛け、学園への道を尋ねてみることにする。

「あー、私——」

「あ、ああ、学園に行きたいんだろ？ その坂道上つてくと時計塔が見えるからさ」

「え？ あ、は、はい、ありがとうございます……」

だが、私の質問に先回りするよう答えたおばさんは、そう告げるなり何か逃げるように裏へと回っていつてしまった。

「——？ どうして、私が学園に行く道を尋ねようとしてるってわかったんだろ？……それに、何か私のことを避けてるような感じが……」

今のは、明らかに態度がおかしかったと思う。

それは、私のことを既に知っていたような雰囲気さえ……

私は一抹の疑問と不安を感じながらも、教えられた通りに坂を上っていく。

少しして、おばさんの言った通り時計塔がその姿を見せ、道があっていたことを示してくれた。普段であれば、迷子になる心配が無くなったこの時点で、安堵の息を漏らしていたところだろう。

でも——今日に限り、足を進めれば進めるほど、私の中で違和感がどんどん大きくなっていった。

「なんで……みんな、この世界での生活にも慣れてるの……？」

そう——道行く人々は、それこそもう何年とこの街で暮らしているかのような足取りで歩いており、一人でおどおどしているのは私だけだった。

みんな、シフトしてきたばかりな筈なのにも拘らず、だ。

「それに……何か、私のことを見てるような気が……」

初めは、きつと気のせいだろうと思っていた。

だけど、学園に近づくにつれ視線の数は多くなり、学園の正門に辿り着いた時にはいよいよ、無視できないほどの人たちが明らかに私の方へちらちらと目を向けていた。

「な、なんで……なんで私、こんなに見られてるの……？」

予想の付かない状況に、逃げ出したいほどの不安が押し寄せる。

最初、みんながおかしいと思っていたけど、きつとそうじゃない。

たぶん——おかしいのは私の方。私だけが、おかしいんだ。

でも、わからない……自分の何がおかしいのか、全然わからない……！

「ほら、あの娘……」

その時——ふと、私を見ている人たちの声が耳に届いた。

そしてその言葉を聞いた途端——私の頭は真っ白になる——。

『ああ、記憶喪失の少女でしょ。知ってる、知ってる。可哀想だよね！』

「え……？」

記憶——喪失？

それ、私の、こと？！

「そ、そんな、記憶喪失だなんて……」

そんな訳ないと、咄嗟に頭の中で否定する。

でも、否定しようとするばするほど、頭の中に浮かんでくる数々の不安要素。

——シフト直後ののに、既にあんなにお店が開かれていたこと。

——道行く人々がこの世界に慣れ親しんでいたこと。

そして——シフト直前の、男性エンジニアが発したあの言葉——。

『あの不良が見つかったコンソールを使用する気ですか!? 危険過ぎますッ!』

「あ、あ……そ、そうだ！ ステータス画面の日付を見れば——!」

混乱する頭の中で、私は今朝見たマニュアルに書かれていた事項を思い出す。

それは、現実世界と同様に、この仮想世界ユグドラシルでも一番最初のエターナル・シフトを「○○○年一月一日」とした暦が数えられていて、ステータス画面の右下に表示しているという内容。私の記憶が正しければ、最初のシフトから二、三日程度しか日数は経っていないから、未だ暦は少なくとも○○○年の一月中であるはずだ。

私はすぐさまメニュー画面を呼び出し、ステータス画面を表示する。
すると、そこには——

「『樹暦○○○四年十一月』……そ、そんな……」

エターナル・シフトから、もう間もなく五年もの月日が経とうとしていることを表した日付が表示されていた——。

「う……あ……」

声が出ない。

胸が押し潰されそうなほど痛い。

助けて欲しいのに——私に向けられる視線が、この上なく怖い——!

「——ッ!」

そうして私の足は、誰かの助けを求め——そして、誰もいない場所へと向かって、無意識のうちに走り出していった。



「——ッ！」

俺は目を覚ますと同時に凄いい勢いで身を起こし、ベッドに座った状態のままステータス画面を開いてすぐさま日付を確かめた。

『樹暦〇〇四年十一月』……俺の記憶とズレはない、か……』

その事実には、俺はホッと息を吐きながら胸を撫で下ろす。

冷静に考えれば、昨日ユキと出会った記憶が呼び起こせる時点で、今朝の夢の人物が自分ではないことは明白だった。

「俺は、なんであんな夢を……」

汗ばんだ手を握り締めながら、夢の内容を思い出すよう虚空を見つめ一人呟く。

シフト初日に学園に行こうとしたが、その道筋で実はシフトから五年近くも時が経っていたこと、そしてシフト以降の自分の記憶が全てなくなっていることに気付かされる夢——間

違いなく、悪夢に分類されるべき夢だろう。

「この世界で見る夢は自分の記憶の回想だけ、つてのは誤情報だったのか……？」

エターナル・シフトにより仮想世界に存在する情報体となった俺らだが、睡眠時には現実世界と同様に夢を見ることがある。

但し、夢といってもあくまでそれは睡眠時に自動で行われる自身の記憶データの整理処理の際にその断片を感じするだけなので、自分の知らないストーリーを見ることはない——と、一般的に言われているし、実際俺もこれまでその説を疑ってはいなかった。

しかし、今朝見た夢は明らかに俺の記憶ではない。

それどころか、あの絶望に襲われた夢の主は——

「あの声色、言動、それに……昨日あいつが口にした『学園に来るのは初めて』というあの言葉……恐らくあれは——」

湧き上がる不安と同時に浮かぶ、一人の少女の笑顔。

まさかな、と自分に言い聞かせながらも、嫌な予感止まることなく膨れ上がったいく。

「……くそっ！」

——そんなこと、ありえる筈がない。

そんな思いとは逆に、俺は誰にともしに悪態を吐くと、飛び出すように部屋を後にした。

世界樹の庭園へ続く扉の前に辿り着く。

昨日とは違い迷うことなく一直線にここへとやって来たが、どうやら起きた時間がそもそも遅かったらしく、昨日来た時と比べ一時間程度しか時間差はない。

「ユキ……」

思い浮かべられる、昨日出会ったあの少女。

あいつが今日もここにいるとは限らない。

ただ、何となくここに来ればまた会えるような気がしただけだ。

「あいつに限って、記憶喪失だなんて……あつてたまるか、そんなこと……!」

呟いて、俺はゆつくりと扉を開ける。

——そう、ありえる筈がないんだ、記憶喪失なんていう稀有な症状。

ましてや、ちょうどユキにあたるなどと……心配するだけでも時間の無駄じゃないか。

募る不安に反発しながら、俺は庭園に足を踏み入れる。

昨日は世界樹の圧倒的な存在感にあらわれ思わず首が上がってしまったが、今日はそれには釣られず、強固な意志を持って世界樹の根元へと視線を向けた。

居て欲しいという気持ちと、居ないで欲しいという気持ち。

そんな相反する感情を浮かべる俺の視線の先に——

「い……た……」

マニユアルを膝の上に置いたまま、ぼうと世界樹を見上げるユキの姿があった——。

「あ……」

どうやら向こうも俺の存在に気付いたらしく、視線を落として顔をこちらへと向けてくる。散りばめられた光の中でこちらを見つめる幻想的な姿——昨日と変わらず、ユキは神聖な雰囲気を漂わせていた。

だが、その変わらなさ故に——俺の心に芽生えていた不安は、より一層大きなものとなる。

「ユキ……」

やや駆け足でユキの元へと近寄り、小さく、それでも十分に相手に届く大きさで、俺はユキの名を呼んだ。

「え、えと……」

それに反応し、声を発するユキ。

昨日の今日で、俺のことを忘れるはずなんかない。

きつと、「また会えましたね、ソウマさん！」などと言って、全てを杞憂に終わらせてくれる筈だ。

俺は不安を拭い去るよう、ひたすら心の中でそう唱え続ける。
しかし――

「もしかして、何処かでお会いしましたでしょうか……？」

「――」
昨日も耳にしたユキのその言葉に――俺は思わず、言葉を失ってしまった――。

試し読み版

ガンソード .EXE

―異能の騎士と忘却の少女―

発行 2014年12月31日 初版第一刷発行
著者 北川まんだ
発行人 小川 淳

発行所 SBクリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167 (編集)

装丁 柊 椋 (I.S.W DESIGNING)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示しております。

©Manta Kitagawa

Printed in Japan

GA 文庫

試し読み版はここまで！
続きは12月15日頃発売の本編にてお楽しみ下さい